ボルノーの生涯と思想（2）

広　岡　義　之

----テュービンゲン大学への招聘から最晩年の思想形成に至るまで----

1　テュービンゲン大学への招聘以後

ボルノー(Otto Friedrich Bollnow,1903-1991)は１９５３年、５０歳でシュプランガー(Eduard Spranger,1882-1963) の後継者として、テュービンゲン大学に招聘された。そして、６７歳の１９７０年の退官まで精力的に哲学・教育学の主任教授としての研究活動を貫き通した。そこでの就任講演のテーマは「希望の徳」であった。ボルノーが「希望」を意図的に選んだという事実は、同大学のブロッホ(Ernst Bloch,1885-) の『希望の原理』第１巻がちょうどその年に出版されたことと無縁ではなかった。さらに神学の立場からもゴーガルテン(Friedrich Gorgarten,1887-1967) が既に人間の希望に対する考えを表明していた。このような状況がボルノーの就任講演の主題選択に深く関連していることは想像に難くない。[1]

ボルノーはブロッホの『希望の原理』を極めて高く評価しつつも、ブロッホは希望の本質を原則的に捉えそこねているとして、以下のような異議を述べた。すなわち、ブロッホのいう「希望」は「自信」にすぎないとボルノーは批判するのである。ボルノーにとって重要な視点は、「希望のなかに目に見えない何か違ったものが絶えず支えながら人間に向かってやってくること」[2]であった。別言すれば、「自分自身の意志を排除し、自分を絶えず支えながらやってくるところのものに自らを完全にゆだねることこそ、希望の本質に属すること」[3]なのである。しかもこうした態度は、未来への責任ある計画を放棄するものではなく、むしろそれを前提とするものである。

５０歳でのテュービンゲン大学への招聘は、ボルノーに「全精力を哲学に

限定しようという意図」[4]を持たせた。就任講演での「希望の徳」が示しているように、ボルノーの関心は実存主義克服の問題に焦点づけられていた。新しい庇護性の獲得のために、感謝・希望・信頼という主題を徹底的に思索し、そこから真の「健全な世界」の重要性を発見してゆくことになる。[5]

ボルノーは、この時期の重要な著作として『新しい庇護性』（Neue Geborgenheit,1955）と『人間の空間』（Mensch und Raum,1963）を取り上げた。１９５５年にボルノーの哲学上の主著、『新しい庇護性――実存主義克服の問題――』が出版された。『新しい庇護性』については、「直接に実存主義との対決から生まれたもので、迫りくる不安と絶望にたいして生命の究極の土台を見いだす試みであった。これらは、あらゆる荒廃にもかかわらず究極には健全な世界の根拠があるという信頼の哲学と、われわれの未来は底なしの淵に没落するものではないその希望の哲学を、迫り来るものから苦心して勝ち取ったもの」[6]であった。

この著作では１９４５年に出版された『気分の本質』の内容がさらに展開され、「生への信頼、存在への信頼、庇護性、支える世界が、生きぬくための基本条件として――実存主義との対決において――この書物の主題を構成」[7]している。さらにこの『新しい庇護性』の教育学上の帰結は、『教育的雰囲気』（Die pädagogische Atmosphäre,1964）において結実してゆく。

ボルノーによれば、『教育的雰囲気』に関する着想は、１９６４年初版の出版よりずっと以前に芽生えていたという。『新しい庇護性』のなかの「感謝」「希望」「信頼」という実存主義克服の諸概念を、教育学的な領域に移行して熟考して完成したのがこの『教育的雰囲気』であった。特に当時のテュービンゲン大学教授で小児科医のアルフレッド・ニチュケ（Alfred Nitschke, 1898-1968）との密接な意見交換によって、『教育的雰囲気』が生まれ出たことをボルノーは強調している。[8]子どもはまず母親や他の信頼される人間によって庇護されて、そうした雰囲気のなかでのみ正しく発達する。

教師の子どもへの不信もまた、子どもの発達を妨げる要因となる。さらに教育者自身がこの世において究極的に守られていると感じるときこそ、真の「信頼」というものを体験しているのである。こうした体験こそ、まさに教育の宗教的な根底となるである。[9]『教育的雰囲気』で論じられている内容は、突然に侵入してくる実存的で強力な事件とは異なり、人間の発展をむしろ「連続的」に「積極的」に支えるものであった。人間相互の信頼と、幼児

期の発達における庇護性の感情の意義の重要性を強調するボルノーは、１９５９年に来日した際、京都の学会で日本の教育学者たちにこの思想を発表して、大きな支持が得られたと述懐している。[10] これら一連の思想は、その後に『教育的雰囲気』という著作に纏められた。

ところで実存哲学はボルノーの教育学にとって、新人文主義的な伝統、つまり調和的な人格を全面的に発展させる「教養」の概念に疑問を投げかけるきっかけとなった。[11] ボルノーを長年苦しめてきた問題は、「人が実存哲学を真剣に取りあげる時に教育学に残るものは何なのか？」[12] という問いであった。実存哲学は基本的にはその本来性を瞬間的に捉えうるものである。しかし継続的な形成を伴う教育学は、その意味で実存的な見解と相入れない。人間の生はたしかに全体としてみれば連続性で説明されうるが、時として実存哲学的な在り方で、突然に非連続的にわれわれの生に侵入してくる出来事がある。ボルノーはそれを教育の「非連続性」と名づけた。たとえば、「出会い」や「覚醒」「危機」などがそれに該当する。

これとの関連で、同時に教育学的な視点からボルノーは、「出会い」の問題について講義することを求められ、「出会い」についての思索が深められていった。その際、「実存哲学の教育学的な結論の問題を効果的にとらえる中心点」[13] がボルノーによって導き出された。それはすなわち、「たえず発展しているという空想に導かれている古典的な教育学の思考にたいして、教育の定まらぬ諸形式の意義を認識すること」[14] であった。こうした論考がさらに発展して『実存哲学と教育学』(Existenzphilosophie und Pädagogik, 1959)が完成した。「教育の非連続形式」が新しいカテゴリーとして、教育学のなかへ持ち込まれたという意味で、これはボルノーの教育学上の画期的な著作というべきだろう。[15]

ボルノーはその画期的な『実存哲学と教育学』のなかで、「教育の非連続的形式」を主張したが、そこでは、「出会い」や「覚醒」「警告」「危機」などの実存的な諸概念が取り上げられた。たとえば「警告」についてボルノーは以下のように述べている。教師たちは、警告は何の役にもたたず、生徒たちは相変わらず元の誤ちへと戻っていってしまう、と言って嘆いているが、ボルノーはこうした現実に対する人間学的な問いを次のように集約した。すなわち「このすぐに悔やまれた現象こそ、人間の本質的な規定の表現」[16] であり、「人間は、一度到達した完全性の高みにいつまでも止まることはでき

ない」[17]ことの表れなのである。これはハイデッガー(Martin Heidegger, 1889-1976)が「非本来性」と名付けたものであり、キリスト教的には「原罪」とも表現できよう。以上のことから繰り返し人間は本来的な在り方へ立ち戻る努力が要求されてくる。それゆえ、伝統的な教育学には見られない実存哲学的な「訴えの教育学」という課題が生じてくる。

こうした例を越えて人間学的な考察の対象となる包括的な領域が存在する。すなわち、「人間と空間」「人間と時間」「人間と言語」との関係がそれに該当する。[18]このような関わりのなかでボルノーは、人間が住むということの人間学的意義を、実存哲学との対決から問うのである。ハイデッガーは『存在と時間』のなかで人間の「被投性」について語ったが、これは果たして本当に正しい人間理解であったのかとボルノーは疑問を投げかけた。ボルノーはその際、バシュラール(Gaston Bachelard,1884-1962)を援用して「人間はこの世界に投げ出される前に、家という揺り篭のなかに寝かされている」[19]と表明した。これとの関連で、『人間と空間』における焦眉の課題は「実存主義の故郷を失った『住み家なき』人間に、ふたたび地上に安定した立場を与えること」[20]であった。ボルノーにとって「家」とは、人間生活を再び現実的なものにする場、つまり「庇護性の空間」を意味した。換言すれば、「家」とは、「空間のなかの住むことと、時間のなかの希望とが、補い合って、積極的に満たされた人間の現存在の、本質的な特徴をなす」[21]ものである。

ボルノーの時間論についても、彼はやはりハイデッガーとの対決から出発した。ハイデッガーもまた、「固定した存在に対抗する生成の強調」[22]という生の哲学的理解を自らの思索の出発点としつつも、この思想を先鋭化して「時間性」の別の理解を提示した。それは一言でいうと「先取りする決断」という概念において頂点に達した。しかしボルノーはこうしたハイデッガーの時間理解を高く評価しながらも、それは一面的な人間理解でしかないとして以下の異議を申し立てた。つまりボルノーは、「ハイデッガーの意味で、欠陥のある様態として価値を低く評価されてはならない時間性の諸形式」[23]が存在することを強調した。この思索がまとめられて『時へのかかわり』(Das Verhältnis zur Zeit,1972)が出版された。その端緒としてボルノーは、「幸せな気分」の時間的体験をマルセル・プルースト(Marcel Proust,1871-1922）に依拠しながら、『気分の本質』（Das Wesen der Stimmungen,

1941)のなかで、精密に分析した。この『気分の本質』はボルノー自身にとって、「精神的遺言の書」と位置づけるほどに重要な著作であった。

ところで、ボルノーの思想の特徴であるが、一つの立場が主張された後に、同時にまた他の立場の正当性が熟慮されるという傾向が見られる。[24] この傾向はけっして論理一貫性の欠如ではなく、むしろボルノーの「開かれた」方法原理に依拠するものと理解しなければならないだろう。『思索と生涯を語る』のなかでは、このようなボルノーの思想の特徴は、「二つの椅子の間に座る」という表現で提示されている。すなわち、「注意深い、断定を避ける物の言い方のすべてが、(中略) 三種類の意味で『開かれて』」[25] いる。第一は、社会の既存の枠組みからいつでも開かれている態度、第二は自分にとって痛ましく厳しいことに立ち向かう態度として、第三に「思考の結果を常に新たに危険にさらす用意があるという、思考の誠実さという意味での『開かれた』態度」[26] である。

ボルノーはこの開かれた態度で以下のような「二つの椅子の間に座る」ことを思想的に実践してきた。たとえば、「生の哲学」と「実存哲学」の緊張関係を生涯持ち続け、そこから教育学に対して多大の貢献をなしたこと、また啓蒙思想の「理性」概念と非合理主義的なロマン主義に対しても、両者に責任を持ち続けようとした。[27]

ボルノーは医師として第二次世界大戦で若くして戦死した彼の恩師、ハンス・リップス(Hans Lipps,1889-1941)の言語論に強く影響された。「言語の問題と人間の世界像を形成するときに言語の意義」[28] をボルノーは教育学の視点から練りあげて、やがて１９６６年に『言語と教育』(Sprache und Erziehung) にまとめられた。「そのさい特に対話的な会話形式が、権威的、独話的な会話形式の対極として重要となる」。[29]『言語と教育』出版の２年後の１９６８年、その数年前に設立されたドイツ教育学会での最初のテーマが「言語と教育」であり、ここでもボルノーの思想の影響力がうかがわれよう。[30]

また１９６３年から６４年にかけての冬学期、１９６６年の夏学期、１９６９年から７０年にかけての冬学期のテュービンゲン大学での講義がまとめられ、１９７０年に『認識の哲学』(Philosophie der Erkenntnis)として出版された。ここでの執筆動機はボルノーにとって精神科学の哲学のテーマがなにゆえに一般的な解釈学的認識論へと解消していったのかを明確にするこ

とであった。[31] ここでは以下のような内容が展開された。すなわち一方でわれわれは了解された世界のなかで生活し、その世界を解釈しようとする。しかしこの解釈はわれわれの言葉で了解された世界である。これをハンス・リップスは、「人間は自分の言葉の観念に『とらわれている』」[32] と表現した。

ボルノーはハンス・リップスの「とらわれている」という概念から出発し、自らの思想をさらに発展させていった。ここでボルノーにとって「あたらしいものの経験」ということが決定的に重要であった。つまりわれわれの了解された世界では、われわれを妨害し、われわれを慣れきった理解から投げ出そうとする何物かが絶えず侵入してくる。われわれはそうした侵入物と対決することを通して、自分の既存の理解の枠組みのなかに取り入れてゆく。しかし、「これが成功するのは、ただ私が同時にこれまでの理解、すなわち私の『前理解』を新しいものにふさわしく拡げていき、訂正していく時に限られる」。[33] このような認識の発展は、「前理解のなかにすでにおかれているものを単にそこから取り出すことではなく、一つの生産的な過程」[34] である。ボルノーは『認識の哲学』のなかで、この事柄を「前理解と新しいものの経験」という解説的な副題で表現しようとした。

『認識の哲学』に続く第２巻目を、ボルノーは『真理の二重の顔』（Das Doppelgesicht der Wahrheit）という表題を付して１９７５年に出版した。真理の二面性について、ボルノーは以下のように考えている。すなわち、一方でわれわれを驚かせ一切の仮面を剥ぎわれわれを破滅へ導く「仮面を剥がす真理」が存在する。これは知的誠実さの要請からくる性質のものでもある。[35] しかしボルノーによれば、この側面だけが真理の唯一の形態であれば、人間の意義深い生は不可能となってしまう。そこで他方で「信頼や希望において開かれ、証明することはできないが、全人間の努力のなかにおいてのみ得られるところの、もう一つ別の支えている真理もまた存在する」[36] ことに気づくべきではないかとボルノーは問題を提起した。そしてボルノーは結論として、この真理の二つの形態の緊張関係を保持することこそが、われわれの生涯に与えられた課題であると強調する。

註

(1) Vgl. H.-P.Göbbeler und H.-U.Lessing, Otto Friedrich Bollnow im Gespräch.
Mit einem Vorwort von Frithjof Rodi, Freibug;München:Alber,

1983.S.32.
ゲベラー・レッシング編、石橋哲成訳、『思索と生涯を語る』、玉川大学出版部、１９９１年、第１刷。
(2) H.-P.Göbbeler,a.a.O.S.33.
(3) H.-P.Göbbeler,a.a.O.S.33.
(4) H.-P.Göbbeler,a.a.O.S.30.
(5) Vgl.H.-P.Göbbeler,a.a.O.S.31.
(6) ボルノー著、浜田正秀訳、『人間学的に見た教育学』、玉川大学出版部、１９８１年、改訂第２版４刷、３０７頁。
(7) 岡本英明著、『ボルノウの教育人間学』、サイマル出版会、１９７２年、１１頁。
(8) Vgl.H.-P.Göbbeler,Otto Friedrich Bollnow im Gespräch.S.80.
(9) Vgl.H.-P.Göbbeler,a.a.O.S.81.
(10) ボルノー著、浜田正秀訳、『人間学的に見た教育学』、３０８頁参照。
(11) Vgl.H.-P.Göbbeler,Otto Friedrich Bollnow im Gespräch.S.78.
(12) H.-P.Göbbeler,a.a.O.S.78.
(13) ボルノー著、浜田正秀訳、『人間学的に見た教育学』、３０８頁。
(14) ボルノー著、前掲書、３０８頁。
(15) 岡本英明著、『ボルノウの教育人間学』、１１頁－１２頁参照。
(16) H.-P.Göbbeler,Otto Friedrich Bollnow im Gespräch.S.48.
(17) H.-P.Göbbeler,a.a.O.S.48.
(18) Vgl.H.-P.Göbbeler,a.a.O.S.49.
(19) H.-P.Göbbeler,a.a.O.S.50.
(20) ボルノー著、浜田正秀訳、『人間学的に見た教育学』、３０７頁。
(21) ボルノー著、前掲書、３０８頁。
(22) H.-P.Göbbeler,Otto Friedrich Bollnow im Gespräch.S.52f.
(23) H.-P.Göbbeler,a.a.O.S.53.
(24) ボルノー著、浜田正秀訳、『人間学的に見た教育学』、３０８頁参照。
(25) H.-P.Göbbeler,Otto Friedrich Bollnow im Gespräch.S.10.
(26) H.-P.Göbbeler,a.a.O.S.10f.
(27) Vgl.H.-P.Göbbeler,a.a.O.S.11.
(28) ボルノー著、浜田正秀訳、『人間学的に見た教育学』、３０８頁。
(29) 岡本英明著、『ボルノウの教育人間学』、１２頁。
(30) ボルノー著、浜田正秀訳、『人間学的に見た教育学』、３０９頁参照。
(31) Vgl.H.-P.Göbbeler,Otto Friedrich Bollnow im Gespräch.S.58f.
(32) H.-P.Göbbeler,a.a.O.S.59.

(33) H.-P.Göbbeler,a.a.O.S.59.
(34) H.-P.Göbbeler,a.a.O.S.60.
(35) Vgl.H.-P.Göbbeler,a.a.O.S.60.
(36) H.-P.Göbbeler,a.a.O.S.60.

2　ボルノー最晩年の思想形成について

ボルノーの晩年の１０年間を振り返ると、満８０歳となった１９８３年という年は、ボルノーにとって外面的には特別な年であったと、ローディ（Frithjof Rodi）はいう。それは、W.ディルタイの生誕１５０周年の年でもあり、特に「ディルタイ研究の知将」[1] ボルノーにとっても極めて名誉なことであったからである。その年、ボルノーはトリーアで開催されたドイツ現象学会での講演、また同年秋のヴィースバーデン市での講演会を精力的におこなった。

しかしローディは、ボルノー自身の「内的生活史」からいうと、１９８３年という外面上の区切りよりも、むしろボルノーの１９７９年の春に注目するべきだという。その論拠としてローディはボルノーがある講演会への招待に対して、いささか諦め気味にローディに語った以下のエピソードを紹介している。すなわち、「私（ボルノー：筆者註）は、商売をやめるために売りつくしセールをやった後のような気分です。具体的に言うと、私は何について話すべきか分かりません。古いことは繰り返したくないし、新しいことは思いつかないのです。」[2] と。これはその当時のボルノーの思索上の精神的行き詰まりを如実にあらわした言説として注目するべきである。１９７９年の当時、ある講演を依頼されていたが、ボルノーは「新しい哲学的テーマを探しあぐねていた時に、もう一度自己の哲学の出発点を熟慮して、彼の師のミッシュ(Georg Misch,1878-1965) や１９２０年代のゲッティンゲン学派について話されてみては如何か、というロディの具体的な提案が、彼（ボルノー：筆者註）に新しい研究の可能性を示したのであった」。[3]

ボルノーはここで彼の思想の出発点だった恩師のミッシュや１９２０年代のゲッティンゲン・サークルの思想について再び思索を深め、それらが後に『解釈学研究』の２巻に結実してゆくことになる。１９７９年７月２０日のローディ宛の書簡では、新しい思索のテーマを見いだせずにいささか疲れていたボルノーは、また新たな課題に真剣に取り組み始めることができ、ボルノー自身、若返ることができたとの内容が記されていたという。さらに、

「バロック時代の教育学は、それゆえ、また静かに冬眠に入るかもしれません」[4]と書かれている程である。

この「バロック時代の教育学」についての説明は、１９３８年のギーゼン大学時代のボルノーの研究テーマにまで遡らなければならない。「バロック時代の教育学」は、１７世紀から１９世紀までの教育史を一般精神史との連関で叙述したもので、この研究は後にマインツ大学でも続行された。ボルノーの計画する教育史５巻のうち、１９５２年に第４巻の『ドイツ・ロマン主義の教育学、アルントからフレーベルまで』が刊行されたが、テュービンゲン大学に移ってからはこの研究は中断されていた。[5]ボルノーは多くの弟子たちにこの全５巻の教育史の執筆を懇願され、彼の晩年になって少しずつ書き続けていた。そうした状況下での、バロック時代の教育学研究の中断の意味するところは次のようなことである。すなわち、ミッシュや１９２０年代のゲッティンゲン・サークルの思想についての深い哲学的思索の課題が、おそらく生涯で最後の研究課題となるであろうことのボルノー自身の決意表明であったと理解できよう。

１９７９年秋には、ボルノーはミッシュのゲッティンゲン大学での論理学講義の研究に着手し始め、ミッシュのタイプ原稿など、詳細な資料の収集をローディに熱心に依頼している。[6]１９８０年の初頭、ボルノーは既に７０頁を越える研究論文を完成させていた。その論文の分量は「生の哲学に基づく論理学の構築」という表題の下に、『解釈学研究』（Studien zur Hermeneutik）第２巻の半分以上を占めるに至った。[7]ボルノーは、１９７９年４月８日付けのローディへの書簡で、ボルノー自身、バロック時代の教育学について研究し始めていたが、それは一時脇におきもう一度プレスナー(Helmuth Plessner,1892-)ミッシュ、J.ケーニヒ(Josef König）を読み始め、まだ使えないノートの山を作ったと報告している。これはボルノー自身の「徹底的な哲学的研究の新しい局面の開始」[8]を意味していた。このようなボルノーの精神的経過を踏まえてローディは、この後に成立したボルノーの著作を「後期著作」(Spätwerk)という概念で位置づけたことは注目に値する視点であろう。[9]なぜならボルノーの晩年の著作が、「首尾一貫して遂行された解釈学的哲学の可能性とは何かという問いから、その内的な首尾一貫性を得ていること」[10]をローディは確信していたからである。

１９８２年２月にボルノーは、テュービンゲンからローディ宛に次のよう

な書簡を送っている。「解釈学的哲学----記述をとりわけ考慮した----の遥かな目標は、思うに甘美な夢に留まるでしょう。（中略）可能性は見えているのですが、しかし私の年齢ではこんなにも遅いのです。」[11]と。こうしてボルノーは高齢と彼の病との闘いのなかで、ついに１９９０年８月に「人間と自然」(Mensch und Natur)の草稿をまとめあげることになる。

このような新しい課題と取り組む晩年のボルノーにとって、１９８６年５月には最後の来日の機会が訪れた。大阪府国際グリーンフォーラム実行委員会の招聘によりボルノーは１９８６年、「都市と緑と人間と」と題する講演を、内外の学者１２００名に対しておこなった。この大阪万国博ホールで開催された「国際グリーンフォーラム--- 都市と緑の文化戦略--- 」の記念講演は、ＮＨＫ教育テレビでも放映された。さらに同年、長年の日独文化交流の功績が高く評価され、日本政府より「勲三等旭日中綬章」が授与されたことはわれわれの記憶にも新しい。[12]

岡本英明によれば、ボルノーは１９９０年１１月に最初の手術を受ける前に、最後の夏休暇をスイス国境近くの南ドイツのヘッヘンシュヴァント(Höchenschwand）にある別荘で過ごした。ボルノーは高齢でなおかつ癌と闘いながら、最晩年の主要な思想を「人間と自然」(Mensch und Natur)と題するＡ４判４７枚の断片的原稿にまとめていた。[13]そしてついに、この原稿がボルノーの遺稿となってしまった。この遺稿のなかで展開されている思想は、主として「解釈学的哲学とりわけ解釈学的論理学、ミッシュとケーニヒに結び付いた『分節化する記述』(die artikulierende Beschreibung）、自然への関わり、などの問題」[14]であった。ボルノーは１９９１年２月７日、８８歳の誕生日（３月１４日）を目前にして、胃癌のためテュービンゲンで逝去された。

それから一年後の１９９２年１月３１日、テュービンゲン大学のクプファーバウ２２番大講堂で、故オットー・フリードリッヒ・ボルノー教授の追悼式が静粛に行われた。この追悼式に日本から参列した一人の森邦昭の報告によれば、ボルノー夫人、アドルフ・タイス学長の他、高弟のクラウス・ギール(Klaus Giel,1927-)、フリードリッヒ・キュンメル(Friedrich Kümmel)、ハンス＝マルティン・シュヴァイツアー(Hans Martin Schweizer）など、同僚、友人その他多くの人々が参加して、ボルノーの人物と作品が偲ばれた。[15]追悼式はボルノーが生前所属していた哲学部と社会＝行動学部の共催

で行われ、ライナー・ヴィーマー哲学部長が両学部を代表して挨拶した。次いでボーフム大学のフリトヨフ・ロディとヴェルナー・ロッホ（Werner Loch）の講演という形で進められたという。[16]

こうしてボルノーの没後、様々な記念会などが開催されるなかで、われわれの今後の課題は、何よりもボルノーの広さと深さを兼ね備えた思想をいかにして教育現実の改善や、より良い人間形成に関わらせてゆけばよいのかを考察するという点に尽きるであろう。われわれボルノーの思想に多かれ少なかれ影響されつつ、教育哲学を学んできたものにとってはこれから、ボルノーの膨大な思想を自らの教育研究に即しつつ、応用発展してゆかなければならない重い任務が課せられているのである。

註

(1) フリートヨフ・ローディ著、大野篤一郎訳、「オットー・フリードリヒ・ボルノーの晩年の著作における解釈学的哲学」、『ディルタイ研究』、日本ディルタイ協会代表、西村皓、第6号、１９９４年3月、2頁。
(2) ローディ著、前掲書、2頁。
(3) 岡本英明著、「ボルノウの遺稿断片『人間と自然』について--- その解釈学的哲学の射程--- 」、九州大学教育学部紀要（教育学部門）、第３８集、１９９２年、2頁。
(4) ローディ著、「オットー・フリードリヒ・ボルノーの晩年の著作における解釈学的哲学」、2頁。
(5) 岡本英明著、『ボルノウの教育人間学』、8頁参照。
(6) ローディ著、「オットー・フリードリヒ・ボルノーの晩年の著作における解釈学的哲学」、3頁参照。
(7) ローディ著、前掲書、3頁参照。
(8) ローディ著、前掲書、3頁。
(9) ローディ著、前掲書、3頁参照。
(10) ローディ著、前掲書、3頁。
(11) 岡本英明著、「ボルノウの遺稿断片『人間と自然』について」、１０頁。
(12) ゲベラー・レッシング編、石橋哲成訳、『思索と生涯を語る』、玉川大学出版部、１９９１年、第1刷、１９０頁の年表参照。
(13) 岡本英明著、「ボルノウの遺稿断片『人間と自然』について」、1頁参照。
(14) 岡本英明著、前掲書、2頁。
(15) 森邦昭著、「故　ボルノウ教授追悼式の報告」、教育哲学研究、第６７号、１９９３年、１１５頁参照。
(16) 森邦昭著、前掲書、１１５頁。